まえがき

この本は、一九二七年(昭和二年)生まれの「少年たち」と戦争の物語です。この「少年たち」は、ものごころがつく頃に中国との戦争が始まり、中学二年の時に太平洋戦争が勃発し、そして十七、八歳の一九四五年八月、広島と長崎に原爆が投下され、十五年間続いた戦争が終わりました。

戦争体験は、その人が生まれた年が一年違うだけで大きく違います。この昭和二年生まれの「少年たち」は、大正育ちの先輩たちが抱いたような戦争への批判や懐疑を知らず、また戦後育ちの人たちのように政治や社会を批判する自由も知らず、国の命運を賭した戦争のただ中で、最後は必ず勝利すると信じ、本気で死を覚悟し、それが正しいと納得して死にたいと願い、一日一日を彼らなりに必死の思いで戦ったのでした。

戦争の体験はまた、同じ日本でも、生きた場所によって大きく違います。この本の「少年たち」は、長崎県長崎市の小学校を出て、同じ市内の中学校へ進みました。本書の下敷きとなった『蛍雪の友』というガリ版刷りの小冊子は、その小学校の同級生たちが、担任だった田中大二先生を中心に、卒業の翌年から毎年一回、第十号まで出したクラス会誌です。その会誌は、原爆によって長崎市が廃墟となる前と後の各五年間に出されました。そこに掲載された文章は、時代の変化や、各人

の成長と生活の変化を反映して、内容も変化していきましたが、戦争というテーマは一貫しています。『蛍雪の友』第四号に田中先生が記したように、この同級生たちは皆、「徹頭徹尾、戦争時代の子」でした。

本書で登場する「少年たち」はすべて実名で、日記や手紙や感想文なども、全部実在のものです。今どき、このような本を書くことに何ほどの意味があるのか、また、はたして読んでくださる方があるのかどうか、まるで分かりません。また一方では、私自身を含む「少年たち」の、幼くも青い真情を記すことに、一種の恥ずかしい思いもありました。

しかし、奇跡的に戦災を免れて、幼い頃から記してきた私自身の日記や、友人や家族と交した手紙等が今も数多く手許に残っており、その中には長崎に原爆が投下された直前直後のものもあります。また、用紙の入手も印刷も至難だった戦中・戦後の十年間にわたって発行された『蛍雪の友』が、ボロボロになりながら全号手許にあることも、何かしら特別なことに思えました。昭和二年生まれの「少年たち」も多くは故人となり、生き残った者も齢八十七歳になっています。

そして最近は、約四年前に起こった東日本大震災さえ、人々の記憶から薄れかかっているようです。戦後七十年を迎えた今、戦争の過酷さ、虚しさについての記憶も消えつつあります。天災も、戦争も、忘れた頃にやってくる。体験した人々は語り継がねばならない。こうした思いが、執筆の背中を押す力の一つとなりました。

目　次

まえがき
序　章　少年たちの出会い（一九二七－三九年）……1
第一章　大東亜戦争の開戦と少年たちの高揚（一九四〇－四二年）……11
第二章　戦局の変化と少年たちの進路（一九四三－四四年）……49
第三章　死の足音と少年たちの覚悟（一九四五年一－七月）……109
第四章　原爆と少年たち（一九四五年八月）……151
あとがき　少年たちのその後……201

＊本書に収められた手紙・日記のなかには、今日の人権意識に照らして不適切な記述も見られるが、作品の史料性に鑑み、原文通りとした。

序章　少年たちの出会い（一九二七－三九年）

「少年たち」は、いずれも一九二七年生まれ。田吉正英（たよしまさひで）と、相川賢太郎と、私、徳永徹の三人が中心である。三人とも長崎師範付属小学校を卒業して、県立長崎中学校に入学したクラスメートであった。私は東京の生まれだが、父・徳永新太郎が埼玉師範の付属小学校の主事を振り出しに、神奈川師範の教頭、神奈川県庁の視学官、長崎高等商業学校の教授と転勤が続いたために、私は小学校だけでも鎌倉、横浜、長崎と転々とした。一年下に弟の恂（まこと）が、また五歳年下に妹の素子（もとこ）がいた。

私が田吉や相川と出会ったのは、一九三八年四月、長崎師範付属小学校の五年に転入した時である。若いクラス担任の田中大二先生に連れられて、木造二階の教室に行き、クラスの皆に紹介された。クラスは私には初めての男女共学で、合わせて五十名だった。

鎌倉とも横浜とも違う雰囲気に戸惑ったが、クラスメートの方も、東京弁を話し、何かと都会風だった私に違和感を持った人が多かったであろう。転校して間もない或る日の放課後、学校横

の坂道で十人ほどの同級生に取り囲まれた。そのリーダーは級長の田吉正英で、からの弁当箱を取り上げられ、私は泣き出してしまった。それを教室の二階から見ていた担任の田中先生から、翌朝、「男子が戦わないで、泣いたりするな」と叱られた。これまでには無かった経験だった。そして私は、次からは、たとえ組み敷かれても戦おうと思った。

しかし、クラスの皆と親しくなるのに時間はかからなかった。仲のよい遊び仲間も何人もできたし、生涯を通じての親友もできた。

田吉正英は、痩せぎすで背が高く、真面目でやや神経質な感じで、勉強も良くできた。父上はこの付属小学校の教頭で、母上も市内の小学校の先生だった。家は私の家からやや遠かったので、遊びに行くことは少なかったが、何歳か下に弟たちがいた。

担任の田中先生は、私たちが初めて受け持つ高学年の生徒だったこともあって、たいへん熱心に、また厳しく指導して下さった。勉強だけでなく、日曜日は先生に連れられて、飯盒(はんごう)持参で野(の)母(も)半島(長崎半島)を縦走したりした。

相川賢太郎とは、こうした遊びの機会を通して気が合ったように思う。家が近かったので遊びに行くことも多く、姉さんが二人、弟が一人、妹が二人の六人兄弟の長男で、大事に育てられていたが、小学校時代の彼はあまり目立つ存在ではなく、中学時代の後半からめきめきと頭角を現したように思う。田吉と相川は、生粋の長崎育ちで、互いに幼稚園以来の仲間だった。

三人とも、まだ記憶以前の一九三一年に満州事変が始まり、以来、戦争は年ごとに拡大、激化していったので、まさに戦争時代の少年たちであった。

顧みると、一九三六年、私が鎌倉の神奈川師範学校付属小学校に入学して、やがて三年生になろうとする時に、二・二六事件が起こった。雪の日だった。ラジオが「流弾が飛んでくるおそれがあるから、家から表に出るな」と放送した。そしてこの日、斎藤実（まこと）内大臣、高橋是清蔵相、渡辺錠太郎教育総監らが反乱軍によって射殺され、岡田内閣は総辞職した。翌日、小学校で聞いたことだが、射殺された高橋蔵相は、一年生の高橋君のお祖父さんだということだった。ずっとあとから知ったことだが、この事件を契機に日本の軍国化が一気に加速し、軍事予算も急速に増大していった。

私も小学生ながらに、その年、日本がドイツと防共協定を結んだことや、イタリアがエチオピアを占領したこと、またスペインで内乱が起こったことなどを一応は知っていた。しかし、新聞の一面に躍るそうした国内外の激動のニュースは、子どもの私には遠い世界の話で、私たちはベルリンオリンピックでの日本人選手の活動に快哉の叫びを挙げ、毎日のようにオリンピックごっこをして遊んだ。

一九三七年春に、私は横浜の市立戸部（とべ）小学校へ転校した。あとから思えば、その年の七月、盧

溝橋で日中両軍が衝突し、日本軍は華北で総攻撃を開始、八月には上海に飛び火し、日中全面戦争が始まった。戦争は拡大の一途をたどり、やがて十二月には中国の首都南京を占領した。私たちは事変の意味もよく分からぬまま、学校を挙げて、万歳、万歳の旗行列で街路を練り歩き、夜は市民の提灯行列を見物に出かけた。戦争の呼称は、最初の満州事変から北支事変へ、更に日支事変へと変わっていったが、日中戦争と呼ばれるようになったのは、戦後のことである。

その夏の横浜の街の様子を、私は日記にこう書いている。

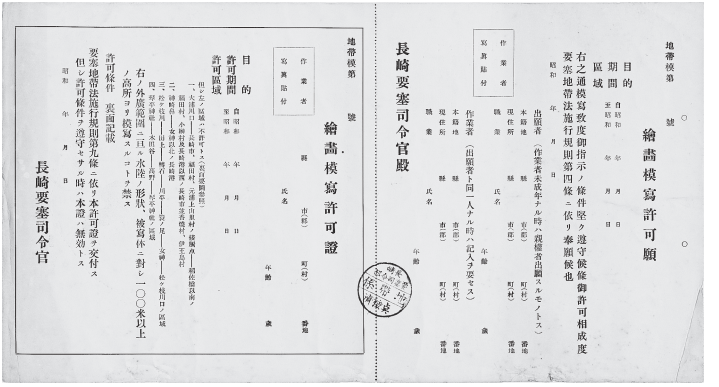
七月三十日　晴［日記］

横浜の町の通りは、方々の家のネオンサインがとてもきれいだ。僕はうっとりとして歩いた。とつぜんパンパンと、ピストルを打つような音がした。やがて音楽の音も勇ましく、手に手に、日の丸の旗を持って、「万ざい、万ざい」と叫びながら、大勢の人が押しよせて来た。僕の前にいた背の高い人が大きな声で「万ざーい、勝って来いよー」と叫んだ。赤と白の細い布を肩から腰にかけていた人は、「ありがとう、ありがとう」と頭を下げながら通って行った。続いて、後から、後から、旗を持った人たちが、「万ざい、万ざい」と叫びながら通って行く。やがて楽隊の音も遠くへ行ってしまった。僕は何とも言えない感激にくれてしまった。

翌年、私は長崎師範付属小学校の五年に転入した。その年の大きな思い出の一つは、初めて泳げるようになったことだ。長崎は海に面しているが、長崎港は上海への定期船が往来するだけでなく、三菱造船や川南造船などの工場が並ぶ重要な軍事地帯で、要塞司令部も置かれていた。そのため海水浴には峠を越えて、東望浜まで行くしかなかった。しかし長崎港口には「ねずみ島」という無人島があり、当時は波止場から二隻の「団平船」が大勢の子どもたちをそこまで運んで、水泳の指導が行われていた。五年の夏休みの日記帖は、このねずみ島での水泳の記事と、朝六時から始まる校庭でのラジオ体操の記事で埋まっている。ラジオ体操の会は日本中の学校や町内会で行われ、最初に厚生大臣の開会の言葉が放送されて、体操のあとは「愛国行進曲」を歌った。

この年、日本軍は徐州、武漢三鎮、広東という、それぞれ北支、中支、南支の中心都市を占領した。私たちはこれで支那事変が勝利のうちに終わるかと思ったが、蔣介石が率いる中国政府軍と毛沢東が率いる共産軍は手を握って徹底抗戦を声明、戦争は泥沼化していった。食糧も、綿糸も、紙も統制が厳しくなり、私たち小学生は「欲しがりません、勝つまでは」を合言葉に物資の不自由な生活に慣れようと努力した。

父はしばしば私を連れて、山や海にスケッチに出掛けた。父は油絵、私はクレパスか水彩で、蜜柑山や海などを描いた。しかし、画用紙の入手が困難になっただけでなく、野外で風景画を描くには、その都度、長崎要塞司令官の許可証（次頁写真）が必要で、外で絵を描く機会は少なくな



地帶候第　號

繪畫模寫許可願

目的
期間　自昭和　年　月　日　至昭和　年　月　日
區域

右之通模寫致度御指示ノ條件堅ク遵守候條御許可相成度
要塞地帶法施行規則第四條ニ依リ奉願候也

昭和　年　月　日

出願者（作業者未成年ナル時ハ親權者出願スルモノトス）　番地　町（村）
本籍地　縣
現住所　縣　郡（市區）　町（村）
職業　氏名　歳

作業者
寫眞貼付

保證者（出願者ト同一人ナル時ハ記入ヲ要セス）　年齢
本籍地　縣
現住所　縣　郡（市區）　町（村）
職業　氏名　歳

長崎要塞司令官殿

地帶候第　號

繪畫模寫許可證

作業者
寫眞貼付

縣　郡（市區）　町（村）　番地
氏名　年齢　歳

目的
期間　自昭和　年　月　日　至昭和　年　月　日
許可區域
一、佐賀郡ヨリ風頭ニ不許可トス（長崎港要塞）
一、大浦川口ノ一部（小瀬村及長崎市ノ一部）
長崎市ノ一部（小瀬村及長崎市ノ一部）
三、伊王島村
四、野母崎村ノ一部（野母崎村ノ一部）
五、高島村ノ一部（高島村ノ一部）
六、神崎村ノ一部（神崎村ノ一部）
七、福田村ノ一部（福田村ノ一部）
右ノ外廣範圍ニ亘ル水陸ノ形狀、被寫体ノ對ノ一〇〇米以上ノ高所ヨリ模寫スルコトヲ禁ス

許可條件　裏面記載
要塞地帶法施行規則第九條ニ依リ本許可證ヲ交付ス
但シ許可條件ヲ遵守セサル時ハ本證ハ無効トス

昭和　年　月　日

長崎要塞司令官

「絵画模写許可願」と同「許可証」.

った。

明けて一九三九年。

一月一日(日)　晴のち曇り［日記］

元旦。皆、登校して四方拝の拝賀式。校長先生はお話の中で、「何事をするにも、君(天皇＝筆者注)の為、国の為と思ってやりなさい」と言われた。僕達は、何事も君のため、国のためにやるのだ。今年は書き初めに、大きな筆で「貫徹」と書く。一年の計は元旦にあり。五年生もあと三カ月。今年は「貫徹」を実行しよう。

一月七日の日記帖には、大きな新聞記事の切り抜きが貼ってある。新しく成立した平沼内閣が、中国での戦争の早期終結が困難となり、「長期建設への重任を荷い、事変新段階の処理に雄々しく乗り出した」というのだ。私は、「僕はびっくりした」とコメントして

いる。

二月には学校の作文で「日本精神」という課題が出た。私は日記風に次の作文を書いて提出した。

「日本精神」　尋五男（「尋常小学校五年男子」の意＝筆者注）　徳永徹

某月某日

今日から一週間、日本精神発揚週間である。田中先生が黒板に、「敷島の大和心を人問はば　朝日に匂ふ　山桜花」と書かれた。我々も、美しく咲いて、美しく散るのだ。

また、主事の先生は、日本精神とは「不自由を忍ぶ」ということと、「協心協力」ということが大切だとお言いになった。僕は、今すぐはできないので、やさしいところから始めようと思った。そして此の週間中は、朝早く起き、家の前をそうじしようと決心した。

某月某日

今日は小講堂で柳堂先生から、神武天皇が日向から大和へ行かれた時の話があった。神武天皇は出陣の前に、「自分は日の神の子孫である。決して君達をやっつけに来たのではなく、此の国を治めに来たのだ。悪いと知った者はゆるしてやるから降参してこい」とおっしゃって、降参してきた

者は助け、それでも刃向かう者は徹底的にやっつけたそうだ。このやり方は、今の支那事変とよく似ている。日本精神は国が始まる時からずっとあるのだ。僕は、此の週間だけでなく、これからもずっとこの精神を持ち続けようと思った。

私たちが六年生になったこの一九三九年の五月に「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」が発布された。二重橋前に、全国千八百校の中学・高校・大学の代表三万二千五百人が集まり、三八式歩兵銃を肩に、短剣を腰に下げて行進し、天皇の親閲式が行われた。小学生の参加は無かったが、明治時代に発布された教育勅語に加えて、この新しい勅語の全文を小学生も暗記することとなった。その勅語は、「国本ニ培ヒ　国力ヲ養ヒ　以テ　国家隆昌ノ気運ヲ永世ニ維持セムトスル　任タル極メテ重ク　道タル甚ダ遠シ　而シテ　其ノ任実ニ繋リテ　汝等　青少年学徒ノ双肩ニ在リ」と始まり、学生・生徒の国に対する大きな責任を強調するものであった。その後この勅語は、事あるごとに繰り返し奉読され、私たちはこれを確実に暗記した。

同じく九月一日から「興亜奉公日」が設けられた。毎月の一日に、全国民が戦場の労苦を偲び、国旗掲揚、宮城遥拝、神社参拝、勤労奉仕などを行うこととなり、私たちも昼弁当には米飯に梅干しという質素な食事が要請された。白地に赤の「日の丸弁当」といっても、白米などは口にできなくなっていた。

国外では、前年オーストリアを併合したドイツが勢いにのってポーランドに侵攻し、これに対してイギリスとフランスが宣戦布告、第二次欧州大戦が始まった。一方、街では毎日のように出征兵士を送る行列が通り、時には戦死者の白い遺骨箱を抱いた行列にも出会った。アメリカは日米通商航海条約を破棄し、国内では国家総動員法に続いて国民徴用令が施行され、小学校でも「大東亜共栄圏」という言葉が盛んに飛び交った。欧米諸国による植民地支配からアジア諸国を解放し、日本を中心としてアジアに共存共栄の新秩序を建設しようとする理念には、私たち小学生も共感した。しかし日常の関心事は、中学入試のための体力検定、ついで米穀が配給制になったことであり、また六十九連勝を達成した双葉山の活躍の方が大きな話題だった。

中学への入学試験は、この年から筆記試験が廃止され、内申書と体力検定だけになっていた。五十メートル走のタイムと、走り幅跳びの距離と、鉄棒の懸垂の回数が決め手となった。内申書では田吉が一番、体力検定は相川が一番だった。

翌一九四〇年四月、「少年たち」は三人とも県立長崎中学校に進学した。